

実践記録：テニスの歴史を学ぶ体育授業の試み

吉中 孝志*・海野 勇三

A Case Study of Teaching the History of Tennis in Physical Education

YOSHINAKA Takashi*, UNNO Yuzo

(Received January 15, 2008)

キーワード：ポーム・歴史・スポーツ文化

はじめに

現在、新学習指導要領の改訂が進められている。そこでは、現行の学習指導要領とは大きな転換がなされることが予想される。その一つが知識の重視であろう。これまでも、体育授業における知識の重要性は語られてきた。この転換期を受けて、本教科における知識の捉え方を整理する必要がある。とりわけ、現学習指導要領の記述に、「運動の特性の理解」とある。「運動の特性の理解をどう捉えれば良いのか」「運動の特性の理解を授業の中でどのように位置づけるのか」このような問題提起のもと、体育における知識を捉える一方策として上記タイトルの単元を設定し、授業実践を行った。

本単元では、テニスの原型であるジュ・ド・ポーム（以下ポーム）における歴史的な発展過程を追体験的に学習することを通して、テニスの特性についての理解を深め、自分の力に応じた技能を獲得するとともに、テニス型ゲームの楽しさを味わうことをねらいとする。

ポームとは、掌でボールを打ち合うことから名づけられた屋内型競技であり、テニスを始めとした近代スポーツが生まれてきた背景を理解するうえでは、多くの要素を提供する価値のある教材である。

生徒は、これまでバレーボールを通してネット型ゲームを経験してきた。よって、ネット型に対するある程度の知識はあるが、時代によってその競技のルールや用具が変化してきた過程については理解していない。

そこで本単元では、ポームからテニスへの発展過程を生徒に追体験させながら授業を進める。この学習により、主に3つの学習効果を期待する。

- (1) 掌から簡易な道具、そしてラケットという用具の発達に合わせて、その用具を使用させラシーを行わせることで、グランドストロークの基本的技能を身に付けさせること
- (2) 歴史的な学習を随所に組み込み、ルールや技術がどのような意図で変化してきたか時代背景を理解させること
- (3) 今後、生徒が仲間とともにゲームを楽しむ際に、そのスポーツが生まれた歴史的背景

*山口大学教育学部附属光中学校

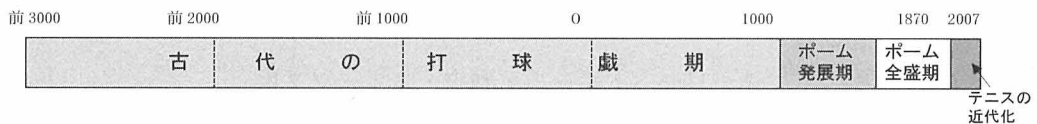
や経緯を大切にしながらルール of 工夫ができるようにすること

1. 授業の実際 (全 18 時間)

(1) オリエンテーション (1 時間目)

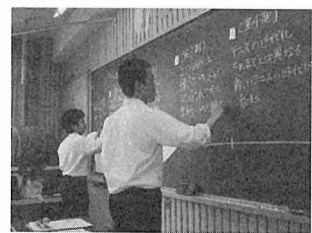
この授業は、本単元の学習の流れを理解することを通して、テニスの発展した歴史を大観するとともに、本単元の学習に興味をもって取り組むことをねらいとした。

この単元を開始するにあたり、自作の副読本をもとに学習を進めていくことにした。これまでとは違った授業への展開に期待感をもつ者、すぐに体を動かすことができないもどかしさを感じる者と生徒は多様な反応を示していた。



時 期	年代	その時代を表す特徴
古代の打球戯期	紀元前 3000 年から紀元後 11 世紀	○テニス型打球戯が、各地域や民族や時代毎に独自の誕生をし、それぞれの発展の道を歩んだ段階 ○この間に誕生したテニス型球技は無数にあるが、テニスの起源として主張されている説は以下の通り (古代エジプト説、ローマ帝国説、サラセン帝国説、ギリシア説、ペルシア説、東ローマ帝国説など)
ポーム発展期	11 世紀にフランスの修道院でポームが考え出され、16 世紀の全盛期を迎えるまで	○手のひらのゲームからラケットのゲームに至るまでの 500 年 ○この時期にポームがフランスからイギリスに伝わる
ポーム全盛期	16 世紀始めから 19 世紀末まで	○精巧なラケットが発明され、ポームの技術が飛躍的に向上する ○ポーム専用コートが各地に設立される ○イギリスで、テニス (tennis) という言葉が定着
テニスの近代化	1870 年代にはじまるテニスの近代化から現在に至るまで	○リアルテニスが、それまでコートの主体性に任されていたルールを統一する ○ウイングフィールドによるローンテニスの提案とその整備がなされ、現代のテニス時代が始まる

次にテニスの発展史を大観させる学習を展開した。テニスの歴史について、年表を図示することによって、生徒は、テニスの歴史は意外に古く (5000 年の歴史がある)、意外に新しい (ローンテニス近代テニスとして誕生してからはわずか 100 年余り) ことを視覚的に理解することができた。この授業により生徒の多くが、テニスの歴史の意外性を学び、関心をもつことができた。



年表を黒板にまとめる生徒

【授業を終えて生徒の感想より】

○日本の古代の時代、縄文土器とかを作っている時に、フランスでは、テニス (ポーム) をしていたと考えると、すごく文化の違いを感じさせられた。
○僕たちが知っていたテニスは、実はテニスの歴史の中でも短い時間であったことにびっくりした。ジュリアス・シーザーも熱心なプレーヤーであったことは驚いた。

(2) ポームの歴史をたどる1 ～当時の人のようにボールで遊んでみよう～(2時間目)

この授業は、身近にあるものから、球打戯をつくり出す活動を通して、テニスの原型となる遊戯が生まれてきた過程を体感することができることをねらいとした。

まず、11世紀のフランスという場面設定を行い、当時の人々が行っていたとされるいくつかの遊戯を体感させた。また、「当時は当然現代のようなボールはなかった。自分の身の周りにある身近なものでボール作ってみよう。」と投げかけると、生徒は、紙・布を丸めたり、松ぼっくりを拾ってきたりして、思い思いのボールを作成した。そして、当時の人々が遊んでいたとされる遊戯図を参考にしながらも、それぞれでルールを作りボールを用いて活動を行ったのである。

多くの生徒は、これまでと違った体育授業の様子に戸惑いながらも、それぞれのグループで楽しく、仲間とかかわり合いながら遊戯を行うことができた。ここで、生徒の活動を見てみると、ボールを空中でしか扱わないことに気づいた。原因は、「ボールが弾まないから」である。確かに弾むボールを作ることは容易なことではない。しかし、ここで弾むボールの存在がなければ、この学習が発展しないのである。そこで、予定を変更し、弾むボール作りについての授業を次時に展開することにした。



各班で思い思いの遊びを作り、ポームを楽しむ生徒

【授業を終えて生徒の感想より】

○現代のテニスも楽しいかもしれないけど、昔は道具も自分たちで作って、そのボールの性質に合わせてルールを作り、オリジナルティのあるテニスを楽しんでいたということがわかった。

○自分たちで自由にいろいろなボールを作り、昔の人がやっていたような遊びができてとても楽しかった。ただ、なかなか弾むボールができなくて苦労した。

(3) ポームの歴史をたどる2 ～弾むボール作り～ (3時間目)

この授業は、前時に引き続き、身近にあるものを利用し、球打戯をつくり出す活動を通して、テニスの原型となる遊戯が生まれてきた過程を体感することができることをねらいとした。特に前回新たな課題として挙げた弾むボールを作り出すことが今回の主な課題となった。

最初に教師は、「どうやったら、弾むボールができるのだろうか。」と発問した。生徒は、「ゴムやビニールに空気を入れてふくらませる。(ふくらませ系)」、「ゴムを固めてボールを作る。(鋳型系)」という意見を出してきた。生徒は、身近な球技に使用するボールや、子どもの頃に遊んだスーパーボールを想像したようである。しかし、意見を出し合ううちに、「当時、空気を入れて弾むボールを作る技術があったのか」「確かに今のスーパーボールは弾むが、当時のゴムは弾力性があったのか」と疑問が生徒の口から挙げたのである。ここで、教師はこれまでの意見を評価しながらも、「ふくらませ系や鋳型系以外で作られているボールが現代スポーツにもある。考えてみよう。」とさらなる思考を促した。

この時、硬式野球のクラブチームに所属している生徒が、そのボールをイメージし、その内部が上記のいずれにもあてはまらないことを発見した。そこで、あらかじめ作っ

ておいた綿を糸できつく巻いたボール（巻き玉系）を生徒に提示しそれを弾ませてみた。意外に弾むそのボールを見て生徒は、驚きの声を自然に挙げていたのである。

生徒は、早速巻き玉系のボールを作り始め、我先にとそのボールを使って遊び始めた。恐らく当時の人も、弾むボールの存在を喜び、バウンドさせる遊びを考案したのであろう。

教師自身も再認識することになったが、弾むボールの存在なくしてテニスの発展はない。この学習を通して、スポーツの発展には、用具の発達が深く関わっていることを実践的に学ぶことができた。予定外に時間をかけた授業であったが、学ぶべき内容も多く、生徒だけでなく教師自身も大変意義深い授業となった。

しかし、ここでまたもや予定外の展開が起こった。ある男子生徒が掌ではなく、学習用のバインダーを使ってボールを打ち始めたのである。本来ならコート（ラインやネット）の意味を学習させた後にラケットの学習を組み込んでいたが、この用具の必要性を感じた生徒に合わせ、ラケット作りの授業を展開することにした。



毛糸を巻き、弾むボールを作る生徒

【授業を終えて生徒の感想より】

○昔の人は、すごく苦勞してボールを作り出し、そのボールが少しでも弾んだところに感動をもっていたことがわかった。自分は、現代に生きていたあまり感動のない人生を送っていたことを感じた。

○オリエンテーションの時に気になっていたボール自体の変化・作り方にふれられたので良かった。最初はふくらませるというイメージしかなく、綿に糸を巻き付けるというのは思ってもいなかったことで、なるほどと思いました。

○バウンドするボールが生まれたことによって、遊び方のバリエーションが増えたので、それぞれの町で違うルールで楽しんでいた。この発展があったおかげで、今のテニスができただんだと感じた。

(4) ラケットの誕生・改良の歴史（4～6時間目）

この授業は、自分のラケットを製作する活動を通して、ポームが掌からラケットを用いることに発展した歴史的過程について理解することをねらいとした。

製作を始めるにあたり、まず「当時の人は、どういう目的でラケットを考案したのか。」発問した。生徒からは、「硬いボールを使うと手が痛いから」、「掌では、ボールに当たる面積がせまいため打ちにくいから」、「ボールコントロールが掌より行いやすいから」などの競技性を重視した意見が多く挙げられた。また、「掌で行うと、野蛮な感じがするので、道具をもつ方が上品に見えるから」、「あえて道具を使うという条件を付け、打ちにくくするため」という視点の変わった意見も挙げてきた。そして、「当時の人のように自分でラケットを作ってみよう」と投げかけ、作業に取り組みさせた。

まずは、ラケットのデザインの考案である。意外にもほとんどの生徒が左右対称のラケットをデザインした。理由を問うと、「左右対称ならスポットが中心になるから打ちやすいであろう」のように教師の予想以上に機能性を重視していたのである。

デザインが決まると、いよいよラケットの製作である。技術科教諭の協力を得、技術室を使用しての作業となった。生徒は、自分のラケットとあって慎重かつ興味をもって

製作にあたっていた。

当初は2時間の単元構成にしていたが、予定よりも時間がかかった。理由として以下のことが挙げられる。

- ①耐久性を考え、丈夫な木を使ったため、木のカットに労力が費やされた
- ②技術室に使える機械が限られており、作業能率が悪かった
- ③思いの外重量があり、生徒が板を薄く削ったり、ボール盤で穴を開けたりと軽量化に時間をかけてしまった

「できるだけ丈夫な材料を」という考えが、予定外の時間を作ってしまった。しかし、多くの時間を費やしたが、お金を出せば何でも手に入る時代に、「自分で使う物を自分で作る」ことを学べたことについては非常に意義深い学習であったと評価している。



糸のこ盤でラケットの曲面をカットする生徒

【授業を終えて生徒の感想より】

- 汗だくになってのこぎりを使ってラケットを作った。今の時代伝でもラケットを自分で作るのは大変だったのに、昔はもっと大変だったんだろう。
- 自作のラケットは作るのが大変だっただけに、何か愛着(?)のようなものがあります。大切にしたいと思います。早く自分のラケットで打ってみたいです。

(5) 自作ラケットでポームを楽しもう1 ～ルールが始まり～ (7時間目)

この授業は、自作のラケットでポームを行うことを通して、遊戯を楽しむための最低限のルールについて理解するとともに、ラリーの技能を高めることをねらいとした。

まず、生徒に二人組でのラリーに取り組みさせた。このラリーは、以下の基本的な2つのルールで制限し、後は自由に楽しませたのである。

- ①サービスはアンダーハンドに制限し、そのサービスからラリーを始めること
- ②ボールは、ワンバウンドかノーバウンドで相手コートに1回で返すこと

生徒は体育館内にあるラインを用い、思い思いにコートを決めてラリーを楽しんだ。この活動を通して、ルール作りを行う上で大切な要素の一つである社交性を意識した学習を進めることができた。遊戯の起源は、余暇の活用や仲間や地域とかかわるといふ「社交」から始まったと言われている。そういった側面で生徒がポームを捉えることが確認できた授業であった。ただ、ラリーの技能を高めるには、活動時間の確保と、ある程度のフォーム学習の必要性を感じた。

【授業を終えて生徒の感想より】

- ポームを通して、コミュニケーションが図るようにできるということは、今現在もスポーツを通してコミュニケーションがとれると思った。
- それぞれの村(チーム)で思い思いにプレーをしていた。だいたいやっていることは同じようなものだったが、コートの大きさなどがバラバラだった。

(6) 自作のラケットでポームゲームを楽しもう2 ～ルールの共有化～ (8時間目)

この授業は、自分たち自身のポームルールを互いに交流させることを通して、遊戯を楽しむためにルールを調節する必要性について理解することをねらいとした。

生徒は、これまでグループごとにルールをつくりラリーを楽しんできた。しかしこの先、グループ間でゲームを行い社交を広げていく場合、その元となるポームのルールをある程度共有していく必要がある。そこで、「当時の人々も、互いのルールを擦り合わせることで、村を越えた交流を実現してきた」と生徒にルールの共有化を図ることにしたのである。

具体的には、①コートの広さの共有化（縦8.6m×横5m）、②4ポイントによる得点方式の導入、③ネットの高さ60cm、の3点である。

生徒は、ネットの登場により、ようやく競技としてのテニスらしさを感じてきたようである。特に、今の時代では当たり前になっているネットをたるまずまっすぐ張ることの難しさを実感するとともに、このネットのたるみこそがローンテニスのネット張り方と関連しているというポームとテニスとのつながりを実感することができた。

また、ルールを共有していくことにより、生徒の学びに2つの方向性が見られてきた。1つは、より社交性が高まったこと。もう1つは、逆に社交性から競技性へと志向が変化することである。仲間とラリーを楽しみながらも、上手にラリーを続けている生徒にうらやましさを感じ、「もっとラリーを続けて仲間と楽しくプレーがしたい」、「いつも負けているので、勝てるようにもっと上手になりたい」という意欲をみせる生徒が増えてきた。グラウンドストロークの技能を高めるための授業を位置づける必要性がでてきたのである。

【授業を終えて生徒の感想より】

○今日、コートの大きさが決まったり、得点方式がチームで統一されたことにより、どれだけ決められた中で点をとっていきのかが問題となってきた。今までやってきたポームのように遊び感覚ではなく、本物のスポーツとして捉えて、技能を身に付けることが大切だなということを感じました

○テレビでウインブルドンを見て、真ん中のネットが低くなっていることに気づいた。先生が授業でテニスのネットの中央が低いのはポームからきたのではないかと話していたことが共感できた。

(7) よりポームを楽しむために1 ～技術性の導入～（9・10時間目）

この授業は、グラウンドストロークの技能を学習することを通して、仲間とのラリーの応酬ができるようになることをねらいとした。

グラウンドストロークの技能とは、床にバウンドさせたボールを捉える技能である。そこで、まずストロークの動作を「テイクバック→インパクト→フォロースルー」に分解し、それぞれの役割について説明した後に、一連のスイングとしてボールを捉えることができるよう反復練習を行わせた。しかしながら、コートの中でラリーを行わせてもなかなかラリーが続かない。原因は、グラウンドストロークの技能そのものよりも、生徒の立ち位置にあったのである。

そこで、「君たちのポームは、テニスと言うよりはバレーに近い。なぜだろう。」と発問し、その発問の意図を考えさせた。さまざまな立場からの意見が挙がったが、プレーヤーの位置に着目させると、その真意が理解できた。コート内からコートの外でプレーするという立ち位置を意識するだけで生徒のグラウンドストローク技能が随分と変わったのである。

運動技能は、単に打ち方を教えるだけで身に付くものでないことを再確認した。今回のようにポジショニングを変えるだけで、スイングをする際にゆったりとボールを捉えることができ、グラウンドストロークの技能を身に付けやすくなった。



コート内で打ち合うため、グラウンドストロークもポレー中心で、テニスらしくない。(失敗も多い。)



立ち位置を変えるだけで随分とテニスらしくなるとともに、グラウンドストロークも行いやすくなった。

また、この授業の中では、仲間同士のかかわり合いの場による技能習得をねらった。この学年は男女ともソフトテニス部員が多く、助言が有効にはたらき、2時間の授業で随分と技能が上達していくと同時に、その楽しさを味わい、学習意欲も増していく姿が見られたのである。最初は遠慮していた運動の苦手な生徒たちもコートを争うようにポームに取り組むようになった。

一方で、これまでより競技性に視点が移り、現在のラリーに物足りなさを感じる生徒も現れてきた。まさに社交が目的であった「遊戯」から、競技としての「スポーツ」にポームが移り変わってきた過程に身を置いている生徒ならではのつまずきである。

【授業を終えて生徒の感想より】

- 後ろにいて構えていると、テイクバックがとりやすいことがわかった。ポジショニングの必要性がわかった気がする。
- みんなだいぶうまくなったが、互いに遠慮して今ひとつ盛り上がらないので、勝敗のあるスポーツって感じがしない。

(8) よりポームを楽しむために2 ～「遊戯」から「スポーツ」へ～ (11時間目)

この授業は、ポームのもつハンディキャップルール(以下ハンディ)について学習することを通して、ポームが社交性から競技性に移行した過程を感得するとともに、ポームのもつ独特の特性を理解することをねらいとする。

生徒は、前回までグラウンドストロークの技能を身に付けるとともに、社交性から競技性へと志向も変化しつつある。それ故に、実力差のある者同士がお互い遠慮しながらラリーを行うことに疑問を感じ始めてきている。

そこで、当時の人も生徒と同じように感じていた歴史的な背景を理解させるとともに、ポームがもつ独特のルールの1つである「ビスク」について取り上げた。ビスクとは、実力差のあるもの同士で試合を行う場合、実力的に下位の者に与えられる1点のハンディのことである。(前頁参照) そのビスクを取り扱ったゲームを行うことでこれまでのラリーがどう変容したかを感得させた。

このビスクの導入により、白熱したゲームが可能になった。特にビスクをとるタイミ

「ビスク」は、セットを通して弱者に与えられる1ポイント(15点)です。ビスクは、トランプのジョーカーのように、その権限を使用するタイミングは自由です。すなわち、ビスクを受けたプレイヤーは、自分の好きな時にそれを取ることができます。(ただし、ボールがインプレイのときは除きます。)
「ビスク」とコールすれば、そのプレイヤーは次のポイントを得ることができます。したがって、ビスクをとるタイミングがゲーム展開の戦略上大変重要な意味をもちます。(副読本より抜粋)

ングにより、相手にプレッシャーを与えたり、デュースに持ち込むことができたり、ゲームに弾力性が表れてきたのである。

今回の授業が終わった後に、大きな課題に直面することとなった。当初、教師サイドではビスクの導入により、白熱したゲームが可能になったと評価していた。しかしながら、後に生徒の学習ノートを確認すると、必ずしも肯定的な評価が見取れなかったのである。「ビスクを用いたが、実力差がまだあり、ゲームの物足りなさは変わらなかった」や、「ビスクを用いたことで、みんなが楽しくできた」と一見肯定的な意見は書いてはいるが、社交から競技へ移行する過程をふまえた意見と評価できなかった。本時の学習内容が把握できたかについては不安を残すものとなった。よって、本時の学習内容をより細かく見取るための授業を組み込んだ。

【授業を終えて生徒の感想より】

○ビスクによって、下手な人でも勝てる可能性があることがわかった。しかし、使うタイミングが大切で、まだ大丈夫と思っていたら負けてしまうこともわかった。強い人とやるとき、ハンディがあることで負けはするけどすぐに負けずに試合を続けることができて良かった。

○ビスクを使ったが、少しゲームが盛り上がったけれど、結局勝てなかった。

○ビスクを使って試合をしたが、やはり1点のハンデでは技能差はつまらなかった。結構遠慮しながら自分はやったが、でも相手は楽しそうにしていたので良かった。

(9) よりポームを楽しむために3～ビスク・オッズを用いたゲーム～ (12時間目)

この授業は、ポームのもつ特殊なルールであるビスク、オッズを自分と相手の状況に合わせて組み込むことを通して、ルールの変更がゲームを楽しむための方策の一つであることを理解できることをねらいとした。

前時の授業を振り返り、「ビスクを用いることで、自分のゲームがどのように変化したか。」とまず生徒に発問した。生徒からは以下のような3つの意見が表出され、その意見に対する対応を生徒とともに考察した。

①白熱したゲームができた (20名)

→そのままビスクを使う

②逆に相手側が不利になった (3名)

→ビスクを廃止する

③変わらなかった (16名)

→ビスク及び新たなハンディ「オッズ」の導入

もちろんこの結果は対戦相手によっても変わる。そのため、もう一つのハンディルールであるオッズを全体に取り上げ、対戦する相手の力に応じてルールの変更を行わせ、ゲームに取り組ませたのである。

ビスクを用いてもゲームの質が変わらなかった生徒は、どのようなハンディをつけてゲームを行えばよいのか、試行錯誤しながらもルールの擦り合わせを行っていた。ビスクを1回ではなく2回とれるようにする生徒、ネットの位置を変え、実力のある者のコ

ビスクが実力差の少ないプレイヤー間のハンディキャップであるのに対して、「オッズ」は実力差の大きいプレイヤー間のハンディキャップの方法です。オッズにはいろいろな種類のものがあります。たとえば、側面禁止というようなものです。側面禁止と称するオッズは、このハンディキャップを課されたプレイヤーはいかなる場合でも自分の打ったボールが壁に触れたり、窓に入ったら1ポイントを失うというものです。

これらのハンディキャップの制度は、プレイヤー間の実力差のギャップを埋め、できるだけ白熱したプレイを楽しめるように、また見るものに勝敗の予測ができないようにするための知恵の産物として今日に至っています。(副読本より抜粋)

ートを広くする生徒、スマッシュを禁止する生徒、利き腕でラケットをもつことを禁止する生徒等、対応は様々であった。授業内ではなかなか全ての対戦に対するビスクやオッズを決めることはできなかったが、できるだけ白熱するゲームを目指して、仲間とかかわりながらルールを工夫する多くの生徒の姿が見られた。

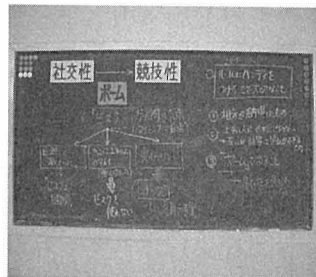
授業の終末に「ラリー中で用いたオッズにどのようなルール変更を行ったか」について生徒に聞いた。生徒は、上記のようなルール変更を挙げてきたが、ある意見に対して「それってポームじゃない」という発言をする生徒がいた。大きくルールを変更することで、その競技の特性が失われるということなのである。この発言から、ルールを変更する上で大切なことを以下のようにまとめて授業を終えた。

①相互の納得に基づくものであること ②ルールを用いることで逆に相手が不利な条件にならないこと ③その競技らしさが失われないこと。

今回の学習を通して、ポームが社交性と競技性の両面を合わせもつ特殊なスポーツであることと、ルールを変更する場合にはそのスポーツらしさが失われない程度に変更し楽しむことを学ぶことができた。今後さまざまな競技に出会い、ルールを変更する必要性が出てくる場面において、生徒が今回の学びを生かしてくれることを期待したい。

【授業を終えて生徒の感想より】

○オッズを使うことは少なく、ほとんどビスクだった。不利になりすぎてもいけないし、実力差があっても面白くないし、互いに満足できるルール作りは難しいと思った。
○ルールを変更する上ではあまりルールを変えすぎると、スポーツのもつ内容まで変わってしまうので、その違いの差を考えながらルール変更を行う必要がある。



本時の授業で取り扱った授業の板書

(10) ポームからテニスへ1 ～ロングポーム誕生の秘密～ (13時間目)

この授業は、ポームの活動の拠点が屋内から屋外へ移行した原因を考える活動を通して、テニスが生まれた時代背景を理解することをねらいとした。

今回は、ポームからテニスへ発展する過程を理解させる重要な授業である。そこで、社会科教諭に担当してもらい、より歴史的な視点からの授業を設定した。まず、「室内で行われていたポームが、なぜ屋外のテニスへと発展したのか。」と発問を投げかけた。この発問により生徒は多くの意見を表出した。生徒は、より幅広い競技性を求めて屋外に出たと解釈した。その意見を競技性と娯楽性と経済性に関する意見に分類し、「庶民は、外へ自ら出たのか、出なければならなかったのか」という発問により生徒の思考を揺さぶったのである。さらに、アンシャンレジウム(当時の厳しい身分階級制度)を提示し、ポーム全盛期における球戯館は、数少ない王族・貴族階級が独占し、多くの市民は屋外へ追いやられたという事実を理解させたのである。

今回は、社会科教諭による歴史の授業を設定したわけであるが、体育で行うテニスの歴史の授業と、社会科教諭の行う授業との違いを見る上では、非常に関心の高い授業で



社会科の教師が担当したポームの歴史の授業

あった。とりわけ、体育でこれまで身に付けてきた既習内容と社会科の既習内容を生徒が選択して活用し、課題に向かう姿が見られたことは大変興味深かった。また、主眼に到達するために「アンシャンレジウム」というこの時代の身分制度を提示し、生徒の思考を自然に授業のねらいへと近づけていった社会科教諭の授業後半のまとめ方は見事であった。

【授業を終えて生徒の感想より】

○ベルサイユ宮殿にもポーム場があったことにはびっくりした。それだけ人々の間に広まっていったのであろう。

○やはりというか、昔はどうしても身分制度の問題があるなと感じた。けれど、皮肉にも貧しい平民たちが外でのポームを始めたことが今のテニスの始まりとなると少し複雑な心境である。

○ポームと歴史の内容がとても関連していることに驚いた。フランス革命とポームが関係していることには驚いた。体育のポームというところから、その時代の歴史の背景が学べることは、とても良いことだと思った。

○屋内のポームが屋外へ移行した過程が理解でき、納得した。今までは、体を動かすことが体育だったが、体育でも歴史の授業のようにいろいろなパターンを見つけて討論できるんだなと感じた。

(11) ポームからテニスへ2 ～ロングポームを楽しもう～ (14時間目)

この授業は、ロングポームを屋外で行うことを通して、一般庶民が行ったロングポームを体感することをねらいとした。

前時の学習を通して、一般市民が屋内から屋外へ追いやられた過程を理解した生徒に、屋内でできない不便さを体感させた。屋外といっても、現代のグラウンドやテニスコートのような整備された土地は当時なかったことを示し、思い思いに選んだ空き池でラリーを行わせた。幸運にも、授業直前まで降った雨の影響で、屋外の状況は悪く、せまいアスファルト道や、芝の上などのぬかるみのない場所を選びながらのラリーとなった。

前時の学習の流れから、屋外へ追いやられた一般市民の心情を感得させることにねらいにおきたかったが、これまでの体育館から屋外へ出た開放感や、思い切りラケットを振りボールを捉える爽快感から、多くの生徒がこれまでのポームより楽しさを感じてしまった。ある程度予想はしていたものの、本時のねらいが達成できなかったことは残念であった。しかし、ポームを楽しむという自分たちの楽しみを奪われるという苦痛を強いられたであろう一般市民が、結果としてこれまでに感じたことのない楽しさを感じ、ロングポームを幅広く発展させていった過程、そしてこの歴史的な背景がテニスを発展させる結果につながっているという事実について、生徒が迫体験を通して理解できたことについては、価値ある学習であったと評価したい。

また、ロングポームは跳ね返る壁がなくなったことで、これまでよりもボールコントロールを行わないとラリーが続かない。このグラウンドストローク技能を高めることの



自作のラケットによる
ロングポームを行う生徒

必要性もテニスの発展に関連していることも生徒は学ぶことができた。

【授業を終えて生徒の感想より】

○外で行うと、室内よりも開放感があった。その分、壁がないのでとんでもないところにボールが飛んだり、自然環境に左右される風でボールが流されたりするので、技能が大切になってくることを実感しました。

○今日は、前庭でロングポームを行った。体育館よりもバウンドが不安定だった。当時の人はもっと悪条件の中でやっていたと思うと僕たちは恵まれているなど感じた。

(12) ポームからテニスへ3 ～テニスへの発展～ (15～17時間)

この授業は、ロングポームからテニスへと発展した過程を追体験することを通して、テニスのルールを理解するとともに、これまでのグランドストロークの技能を生かして、テニスを楽しむことができることをねらいとした。

この学習は、3時間の計画で設定をした。最初の1時間は、テニスコートにおいて、前半はこれまで使っていた自作のラケットを用いて、後半は現代のテニスラケット用いてラリーを行わせ、その違いを体感させたのである。

次の1時間は、まず副読本を元にゲームを行う上で必要なテニスのルールを確認させた。生徒はこれまで学んだポームの基本ルールの共通点や相違点と比較させながらテニスのルールを理解した。その後、コートでのラリーを通して、ポームで学習したグランドストローク技能のポイントを想起させた。自分の思った通りの場所にボールが飛ばず、随分と苦労していたが、インパクトの位置に焦点をあてたりラケットを肩まで運びフォロースルーを取ってみたりと自分なりにグランドストロークの要素を意識しながらラリーに取り組む姿が見られたのである。

最後の1時間は各グループでコート振り分け、特に細かな指示を与えず、自由に活動に取り組みさせた。生徒は限られたコートと時間を有効に使うためにダブルスを組んでゲームを行ってみたり、1ゲーム性の勝ち残り戦を仕組み入れ替わりを活発に組んだり、思い思いのゲームの楽しみ方を進めることができた。審判についても、自発的に審判台に挙がり、「30-40(サーティ、フォーティ!)」とテニス独特のコールの仕方を楽しむかのように審判を行っていた。

次頁の表は、生徒が自作ラケットと従来のラケットとを用いてソフトテニスのボールを打ち比べを行った比較である。



	自作ラケット (木)	現代の市販ラケット (木・ガット)
利点	○柄が短く、ボールコントロールしやすい。 ○比較的安価で作れる	○軽い ○空気抵抗が少ない ○遠くへとばすことが可能
欠点	●重たい ●空気抵抗が大きい	●柄が長く打ちにくい ●製作技術が高い。高価である。

これまで、ボールやネットという用具の発展を通して、テニスの発展とのつながりを見てきた。生徒もこの道具の開発・改良が一つのスポーツの在り方を左右してきたことは十分理解している。そうであるならば、このラケットの発展過程についての学習はもう少し時間をかけて行う必要があるかもしれない。今回は、予定していた授業時数よりも多くの時間をかけてきたため、後半が急ぎ足になってしまった。その内容と方法については今後検討したい。

また、ここでの学習は、できる限りテニスコートでラケットを用いてテニスをさせたかった。よって活動そのものが中心になり、技能の系統的な学習が少し不十分であったことを反省する。技能習得の時間の確保についても今後の課題として位置づけたい。

【授業を終えて生徒の感想より】

○木のラケットとテニスラケットでの打ち比べをして、現在のラケットがどれだけすごい物なのかがわかった。

○今日は、木のラケットから普通のラケットになって、コートでゲームのような物までした。かなり楽しかったし、ここまできてやっとテニス競技性もあり、社交性もあるスポーツだということがわかった。

(13) まとめ (18時間)

この授業は、テニスの特性について振り返る活動を通して、これまでの学びの進め方を整理するとともに、自己の技能や運動の楽しみ方の変容を振り返ることができることをねらいとした。

生徒は、これまでの単元の学習の振り返りを学習ノートにまとめた。今回、副読本と学習ノートと1つにまとめたことで、前時まで学習履歴を容易に振り返ることができ、成果を整理しやすかった。

本単元は、多くの学習内容の獲得を仕組んできた。教師の計画やねらいに対して生徒がどのような学びを実現したかについては、教師の授業内で見取りと学習ノートに書かれた感想を振り返り所とする。その振り返りについては、考察という形で次頁より述べていきたい。



副読本に学習の振り返りを行う生徒

【授業を終えて生徒の感想より】

○ここ数年間、部活動を通してテニスにかかわってきましたが、テニスを原点から学ぶことでさらにテニスが楽しくなった。テニスは昔貴族がゆうゆうとテニスをし、一般市民は工夫をしながら不自由を感じつつテニスをしていた。今では、老若男女問わず自由にテニスができる。今自由にできることを当然と思わず、テニスを楽しみたい。

○体育は、ただ運動をすればよいというものではないと気づけて良かった。気づいてないわけではないけど、今ではそういうところが自分には結構合っていると思います。

○歴史を感じながら授業を行うことで、1つ1つのルール、道具、コートができた理由がわかって、そこを意識しながらプレイすることができたのですごく役立ちました。でも、もう少しポームとテニスをする時間がほしかったです。

○ポームは、ヨーロッパ中心ということもあり、高貴な感じがします。今でもルール

にビスクやオッズがあるのはすごくユニークだと思います。ローンテニスの競技性重視というよりは、社交性を目的としていたことがわかります。

○何よりもラケットを自分で作ったことがとても印象に残っています。自分が使う物を自分で作ると熱心になってそのことに打ち込んでとてもこの授業を楽しめました。

○「テニスは貴族が行うスポーツ」というイメージは間違っていた。ポームをテニスに発展させたのは庶民であるから、「庶民のスポーツ」といえるのではないか。

○ソフトテニスは、日本で生まれたスポーツと初めて知りました。当然のように外国から入ってきたものだと思っていたので驚きました。ソフトテニスは、日本でできたスポーツで、ある意味大切な日本の文化だと思ったので、これからも大切にしていきたいなと思いました。

○長いテニスの歴史を振り返っていく中で一番おもしろいと感じたことは、コートの大きさが決まったり、ネットが張られたり、サービスの位置が決められたりするなど、1つのルールや条件が加わるにつれて、それに対応する技能が必要になることです。当たり前なのかもしれませんが、こうやってテニスというスポーツが発展してきたのかと思うとすごく楽しかったです。

○もしかしたら、ポームが屋内から屋外へと変わったように、このテニスというスポーツにも、これからそういう大きな変化が訪れるかもしれない。その瞬間を自分の目で見れたらおもしろそう。

2. 成果と今後の課題

(1) 学習の成果

今回の授業を構想するにあたり、多くの学習効果をねらいとして設定してきたが、その成果について三つ述べる。

まず一つ目は、歴史的な学習の効果についてである。例えば、サッカーのオフサイドやネット型のサービスの由来など、これまでの授業でもスポーツやルールが生まれた歴史については学習させてきた。しかしながら、そのルールが生まれてきたその歴史背景や風土といったものの理解なしにはなかなか生徒に身に付けづらい。この学習を通して、多くの時間はかかるものの、競技の歴史のなかに生徒をいざない、体感的に学習させることへの有効性について見出すことができた。

二つ目は、生徒の学びの弾力性の保障である。今回の単元構成は、初めての試みであったせいもあり、教師側が意図していたものでは、生徒の思考がスムーズにつながらなかった。また、教師の計画よりも、生徒が理解したり活動したりする時間をよりかけなければならなかった場面が多くあった。まさに、授業は生き物である。生徒の学びに合わせて可能な範囲内で弾力的に対応していく必要性を実感した。

三つ目は、新たな学習の可能性についてである。ラケットの製作過程では技術科、歴史を振り返る過程では社会科の教員の支えを借りて授業を進めてきた。それぞれの授業の有効性は明らかで、体育の授業だけではなしえない生徒の学びが多く実現できたのである。大きな課題を設定した際には、生徒の学びは一つの教科ではおさまらない。文部



科学省の捉えている探究型の授業や教科横断の授業の可能性も感じることでできた実践になった。

(2) これからの課題の考察

今回、体育における知識をテーマに実践を進めてきた。テニスにおける歴史学習が、「体育は何を学ばせる教科であるか」について、一つの問題提起できたことは間違いない。生徒の感想を見ても、運動・スポーツを、からだを動かす道具、仲間と楽しむための手段としてではなく、一つの文化として捉えていることがわかる。また、生徒なりに運動・スポーツの楽しみ方を広げる可能性も見出している。さらに、批判的な目で見える力までには及ばなかったが、運動・スポーツを多面的に捉える視点を身に付けることができたことと確信している。

これから生徒は、新たな運動・スポーツに出会った際にも、運動・スポーツ、或いはそのルールや道具が生まれてきた歴史・背景を探りながら、運動・スポーツに取り組んでいくに違いない。そして、行うだけでない、みる、支える、つくるといった運動・スポーツの楽しみ方を身に付けていくに違いない。この楽しみ方〔行い方、見（観）方、支え方、作（創）り方〕こそが体育学習に必要な知識といえるのではないか。そして、この楽しみ方を総合的に学べる歴史学習は有効な学習であるといえるのではないか。

しかしながら、この実践の有効性を語るには、まだ課題も山積する。特筆すべきは、この授業における技能習得過程の位置づけである。全18時間の大單元の中に技能習得抜きの構成はできない。よって、獲得できた知識や態度が、技能習得に密接に結びつくような單元構成を工夫する必要がある。今回も、テニスにおけるグランドストロークの技能を身に付けることをねらいに据えた。しかしながら今回の実践は、予定していた時間よりも授業が長引いてしまったため、単元の後半に仕組んでいた技能習得のための十分な時間の確保ができなかった。今後は、技能習得のための時間が確保できるよう、そして効率よくその技能が習得できるような單元構成を仕組んでいきたいと思う。

最後に、今回の授業を振り返り、更新した單元構成を載せておく。

参考資料

最新スポーツ大事典 大修館書店 岸野勇三 1987

中学図解体育 2005～2007

【 授業を終えて更新した単元構成表 (全 20 時間) 】

次	時	学習内容・活動	主 眼	指導上の留意点
1	1	オリエンテーション	本単元の学習の流れを理解することを通して、テニスの発展した歴史を大観するとともに、興味をもって本単元の学習に取り組むことができる。	・テニスの特性を大観させるため、テニスのもつイメージを絵や単語で表現・共有させる。 ・テニスの発展史の区分を大まかに捉えさせるため、年表を用いる。
2	2 ・ 3	ポームの歴史をたどる ・ボールの歴史	身近にあるものを利用し、球打戯をつくり出す活動を通して、テニスの原型となる遊戯が生まれてきた過程を体感することができる。	・球打戯が生まれてきた過程を体感させるため、取り扱うボールをつくるための学習の場を設定する。
3	4 ・ 5 ・ 6	自作ラケットの製作 ・ラケットの誕生の歴史	ラケットを用いる必要性から自分のラケットを製作する活動を通して、ポームが発展した歴史的過程を理解することができる。	・ラケットの製作にあたり、デザインよりも機能性に着目させるため、素手からラケットに発展した理由について予想させる。
4	7	ポームの発展過程 1 ・サービスの歴史	自作ラケットを用いてラリーを行うことを通して、グラウンドストロークの基本技能を身に付け、ラリーを楽しむことができる。	・グラウンドストロークの基本技能を身に付けるため、サービスマットの制限を行うなど、ラリーが行いやすい条件を設定する。
5	8 ・ 9	ポームの交流による 共通ルールの誕生 ・ネットの歴史	自分たちのつくり出したポームを互いに交流させることを通して、遊戯を楽しむためにルールを調節する必要性について理解することができる。	・ルールの共有化を図るために、ポイント制の導入やネットの存在を理解させる。
6	10 ・ 11	よりポームを楽しむ ために 1 ・グラウンドストローク	ポームをより楽しむためにグラウンドストロークの技能を学習することを通して、仲間とラリーの応酬ができるようになる。	・グラウンドストロークの技能の学習をよりよく行うために、その構造をテイクバック・インパクト・フォロースルーの 3 つに分類して整理するとともに、グループによる反復練習を仕組む。
7	12 ・ 13	よりポームを楽しむ ために 2 ・ハンディキャップ ルール	ポームのもつ特殊なルールについて学習することを通して、ポームが社交性から競技性に移行した過程を感得するとともに、ポームのもつ独特な特性を理解することができる。	・ポームのもつ独特な特性を理解させるために、「ビスク」「オッズ」というポーム独特のハンディキャップルールを取り上げ、それを用いたゲームを仕組み、その良さを検証させる。
8	14	ポームからテニスへ 1 ・ロングポーム誕生 の秘密	活動の拠点が屋内から屋外へ移行した原因を考える活動を通して、テニスが発展した時代背景を理解することができる。	・テニスが生まれた時代背景を理解させるために、ポーム全盛期のフランスの厳格な身分制度である「アンシャンレジーム」を取り上げる。
9	15	ポームからテニスへ 2 ・ロングポームを 楽しもう	一般庶民が行ったロングポームを体験することを通して、テニスへ発展した歴史的過程を大観するとともに、より高いラリーの技術の必要性に気づくことができる。	・当時のロングポームをよりリアルに体験させるため、整備されていない場所でのラリーを経験させる。
10	16	ポームからテニスへ 3 ・ラケット改良の 歴史	ラケットが改良された歴史を学習することを通して、ポームがテニスへ発展してきた過程を体感的に理解することができる。	・自作のラケットと従来のテニスラケットでボールを打ち比べさせ、その違いを体感させる。 ・ラケットの歴史的変遷について、効率的に理解させるため、副読本の資料を活用する。
11	17 ・ 18 ・ 19	ポームからテニスへ 4 ・テニスへの発展	ロングポームからテニスへと発展した過程を追体験することを通して、テニスのルールを理解するとともに、これまでのグラウンドストロークの技能を生かして、テニスを楽しむことができる。	・グループ間で協力して自主的な学習を進めさせながらも、グラウンドストローク技能獲得のための反復練習を効率的に仕組む。 ・限られたコートの中での学習を充実させるため、プレーだけでなく審判などにも積極的に取り組ませる。
12	20	振り返り	テニスの特性について振り返る活動を通して、自己の技能や運動の楽しみ方の変容を振り返ることができる。	・これまでの学習の成果を振り返るために、副読本のこれまでの学習のまとめを活用させる。 ・自己の学びの変容を技能・態度・学び方に分類して整理させる。